

監修・恒松恭助

楨

小説選集



★文学クラブ・楨の会★

監修・恒松恭助



小説選集

榎の会

「楨」小説選集

定価 1,200円
送料 300円

1987年 9 月20日

第 1 刷発行

編集・発行所

楨 の 会

〒290-06 市原市田渕2225 遠山方

印 刷 所

千葉印刷所

〒280 千葉市貝塚町192

目 次

トンネルは長かった……………勝山朗子 5

出札窓口……………吉野孝治 27

秘密……………宇田川きづた 47

山吹屋敷……………遠山あき 77

辛夷こぶしの咲く家……………佳成喜美子 107

山の上の牧場……………守屋直助 141

彦根のころ_y

田村 文 169

北京へ・敗戦

篠崎 てい 183

指 輪

中村 靖子 205

花友だち

野中 雅子 223

柿色のコート

久保村 千枝 241

集 積

稲石 高章 263

● あとがき

恒松 恭助 308

装幀・カット

鈴木 康之

トンネルは長かった

勝
山
朗
子

私は両手を這うような格好にして、階段を上がって行つた。こうすれば少しは心臓に負担が掛からない。最後の一段を「よいしょ」と掛け声を掛けて上がった。

「わあ、この階段、もう少しゆるく造ればよかったわねえ」

言いながら舅の部屋に入ると、舅が畳の上にくの字になって転がっていた。

「ありやあ、おとうさん大丈夫？」

「は、い。大丈夫、です。しかし、待っておりません。あなたが、来てくださるのを、待っておりませんでした」

と、畳にはおをくつつけた姿勢で、途切れがちに言う。

「待っていましたって、起き上がれなかったの？ さっき、掛け布団でくるんで座らせてあげたのが、いけなかったのかな」

言いながら部屋を見回わすと、その掛け布団は八畳の隅に投げ飛ばしたような形で、放り出してある。

私は舅の体を抱き起こし、お尻の下に藤（かき）でできた座椅子をすべりこませた。

「いたたッ。痛いですよ、乱暴ですわねえ」

「だって、こうしなきゃ、おとうさん、また倒れてしまうでしょ。膝でおとうさんの背中を押さえて、

手で座椅子を押しこんでいるのよ。ほら、もう少し自分で座る気になってくださいよ。ほうら、一、二、三の三ッ」

私はやっこの思いで舅を食事のできる姿勢にした。

「あなたは どうして、そうハアハア言ってるんですか」

「おとうさんが重たいからよ。おとうさんは今、布団の外にいたでしょう」

私はやっと思いを整えながら言う。

「しかし、わしはハアハア言っとらんでしょうが」

「そうよ、おとうさんはただ、グニャツとしていただけですもの。もうちょっと、しっかりしてもらいたいですねえ」

「何を言ってるんですか。わしはこの通りしっかりしますよ。あなたにご迷惑がかからないように、一人でちゃんと便所で用をたしておりますですよ」

突然「便所」が出てきた。私は取り合わずに階下へ降りた。そして朝食の味噌汁を温めて再び二階へ上がった。味噌汁の実は九十九里のテブチ、舅の好物である。

部屋に入ってまた驚いた。舅はもう畳に出ていた。今度はベタンと座って、深々とうつむいていた。「どうかしたの？」

「静かなること林のごとし……」

うつむいたままつぶやいた。見ると回りの畳が一面にぬれている。

「あらあ、びっしょりノ」

「今、水をまきました」

「どうして水なんか……」

「汚したからです。汚したから、水をまいたところなんです」

「……本当はオシッコしたのね」

「ま、そう言いなさんな。こっちだつて氣をつけてるんですから」

ふと正氣にもどつたような声だつた。

「そうよね、氣をつけてるのに出ちやうんだもの仕方ないのよね。失敗だものね」

私は自分に言い聞かすように言つて、畳をふき始めた。すると「失敗」と言つたのが氣にさわつたのか、急に舅が荒々しく言つた。

「失敗ではないかもしれませんが。本当はわざとしたのかもしれませんが」

と「わざと」のところがねつとりと言ひ、暗い目でじつと私を見すえた。四つん這いになっていた私は飛び上がつて叫んだ。

「冗談じゃないわよ、どうしてわざとオシッコなんかするんですかッ」

言いながら激しく動悸している自分に氣がついた。いけない、いけない、興奮してはいけない。落ちて、落ち着け、ここは放つておいて静かにしていなくちやいけない。また狭心症の発作（いんげん）が起きる。姑を呼んで舅の着替えを手伝つてもらおうか、いやいや止めとこう、きつとまた姑は舅を叱（い）かりつけることだろう、すると舅は大声で怒鳴つて姑を威嚇するに違ひない、そういう二人を見るくらいなら、いま大急ぎで始末してしまおう。私は夢中で畳をふいていた。そのとき、胸がしめつけられた。鋭い痛みが背骨を突き抜ける。私はあわててポケットから舌下錠を取り出して口に含んだ。狭心症の即効薬だ。いつも手離せない。

薬が効いてやつと落ち着き、ふと見ると舅が投げ出した足を伸ばしたり縮めたりしながら、丸出しのお尻も使つて器用に机のところまで行くのが見えた。そして、あつという間に机の上の味噌汁から

テブチをつかみ取って食べ始めた。

2

車で出勤する夫を見送ってから茶の間にもどってみると、待っていたように姑が言った。

「ねえ、よく見て。間違いないよ」

姑は舌を出して見せている。舌はチョココレートを塗りつけたような色をしていた。こたつの上には「家庭の医学書」と手鏡が置かれていた。姑は日に何十回も手鏡を見て自分の顔色や目のくぼみ具合、唇のつや、舌の色などを調べている。「家庭の医学書」と首っぴきで、毎日「声のかすれる病氣ってなに？ 喉頭ガンかしら。わたしの声かすれてるでしょう」と言ったり「わたし、このごろ一睡もしていないの。人間は眠らなきゃ死ぬんでしょ」と言ったりする。姑自身の診断によると昨日までは胃ガンにかかっていて、今朝になってから舌ガンになったのだ。

「痛くないなら、舌ガンではないわ」

私はきっぱり言い切った。もうこれ以上、姑のガンごっこには付き合っていられない。二階にいる舅だけで手いっぱいだ。

「でもねえ、全然、味がしないんだよ。味を感じないの」と弱々しい哀れな声で言う。

「内科のお医者さんは何回検査しても、異常なしと言ってるのよ。それを信ずることね」

「信じられないよ、こんなに体がだるくつちゃあ。どこかのガンに違いないよ。ほら、こんなに痩せちゃった」

姑は両方の二の腕を出し、片方の手でもう片方の腕の皮を引っ張って見せた。たるんだしわが伸びたままなかかな元にもどらなかつた。事実、三十二キロに痩せてしまった姑を見ると、確かにどこか異常があるような気はする。第一に生気がないし、何をするのにも大儀そうにやっと体を動かしている。

姑はふすまにつかまりながら、のろのろと立ち上がった。

「体に大きな石が縛りつけてあるみたい。重くてだるくて仕方がないよ。今日またレントゲンをとってもらうわ。血沈と血圧を計ってもらって薬ももらってくる。舌も診てもらおうよ」

数えるように指を折りながら言った。私は「気の済むようにすればいいわ」と思いながら聞いている。きつと病氣ノイローゼなんだわ。いくら内科へお百度を踏んだって無駄かもしれない。そう思った。

二階の廊下のあたりでドスンと鈍い音が聞こえた。続いて重い物を引きずるような音がした。舅が部屋から這い出して廊下をいざづっている音かもしれない。私は素っ飛んで二階へ上がった。階段の途中でひどい臭気が鼻をついた。私は思わず叫んだ。

「ひゃあ、おとうさん、廊下ににウンチしちゃあ、だめじゃないのう」

舅は廊下の真ん中に両足を投げ出してペタンと座っていた。下半身を丸出しにして、顔は澄ましたものだ。私の顔を見ると、

「あんよが痛いよう」と言う。

このごろの舅は「おくち」「おてて」「まんま」などと幼児語を使う。やたらに威厳を保ってばかりいた舅が一体どうしたことなのだろう。

「部屋へ入りましょう。ここは寒いわ」

舅の後へ回わってギョツとした。やたらに踏みつけられた大便があった。尻っぺたにもべつとりくつついている。

「ちょっと、ちょっと、おとうさんよ」

「はい、はい、何ですかよ」

あわてている私に、舅は大まじめで調子を合わせている。

「立ってくれないかなあ。無理ねえ、しばらく立ったことないものねえ」

「いいえ、あなた、立てないなんてことがありますか」

ゆったりとそう言うのと、これもまたゆっくりと両手を宙に泳がせて舅はつかまるものを探した。片手で流し台をつかんで立とうとする。私は舅の背後から両脇を持ち上げた。足元に大便があるから足場がよくない。舅が大きくよろけた。「ひゃあ」と叫んだ私は大便を踏みつけないようにドタドタツといっしょによろめく。同時に下半身が丸裸の舅が「うおお」と変な叫び声をあげて私にしがみついていた。

「待って、待ってよ、おとうさん待って」

私は叫び続けた。その騒ぎを聞きつけて姑が上がつて来た。手にボロ布を持って、おずおずと私に差し出した。

「早くそこをふいてッ。おかあさん！」

舅にからみつかれたまま私は肩ごしに床の大便を指さした。姑は緩慢な動きで着物の裾をはしよると、さもないやでならないという顔つきで床をふき始めた。“仕方ないでしょ、ご自分の夫のウンチじゃないの”私は心の中で意地悪く叫んだ。

舅の体を倒れないように流し台に寄り掛かせて、私は舅の真ん前にしゃがんだ。しなびた男の性

器が目の前にあった。それも、太ももやすねと同じように排泄物にまみれていた。汚れをぬぐいながら私は「よし、よくこなれている」と思った。こんなせつば詰ったときに、便の硬さや色を観察している自分に我ながらあきれた。

突然、床をふいていた姑が泣き出すように叫んだ。

「もういやッ。本当にこれは地獄だわッ。地獄よりひどいよ。なんだってわたしがこんな目に合わないのよッ」

大便のついた布を床にたたきつけた。

「なんだとおう」

舅も叫んだ。泣いているような、獣がほえているような声だった。

「待って待って、動かないでおうさん」

私は大声をあげて舅の足首を押さえた。それがいけなかった。舅は私の手を振り払おうとして、ものすごい勢いで私の胸を蹴り上げた。蹴られた拍子で私は尻もちをついた。

「何をするの、おとうさんッ」

もう怒ったぞ！ もう知らないぞ！ 私の体は小刻みに震えていた。

「もういやだからね、もう……」

大便の中に尻もちをついたまま私は姑を見上げてにらみつけた。はつきり、もっと言ってやろうと思っているのに、口がゆがんで唇が震えて言葉が出なかった。どつと涙があふれた。急に、今までは気にもしていなかった大便の臭気が、周りじゅうから押し寄せてきた。

「雪が降って来たぞう」

夫が肩をすくめて勤めから帰って来た。茶の間に入って、おぜんの上にある出前の寿司に目をやった夫は「また何かやったな」と察したらしい。店屋ものがおぜんにあるということは、舅が私をてこずらせた証拠みたいなものだ。何かあるたびに姑は「あんたの体が一番大切だからね、今夜は何も作らなくていいよ」と言って、近所の店から特上の寿司をとってくれるのだった。

寿司を食べながら私は不機嫌だった。「あきちゃんの体が大事」と言ってくれる姑なのだが、そのくせ「わたしにはできないから、あんたにやってもらうしかないのよ」の一点張りで、舅の世話は全くする気がない。そのところが私には釈然としないのだ。今夜もテレビのニュースは、やれ雪祭りだ、やれスキーだと、冬を楽しんでいる人たちを写し出している。よその人たちはあんなに楽しそうにしているのに、と私は面白くなかった。この面白くない気持ちを夫には解とつてもらいたかった。

「あのねえ、今日はねえ……」

と言いかける私の言葉を夫はさえぎるように、

「おやじはもう寝たか？　そうか、まだか、この寿司あとでおれが持つて行ってやろう」
などと言う。でも私は続けた。

「今日もひどかったのよ。ウンチ踏んじやって、足の指の間に入ったのが、なかなか取れなくて……。おとうさんたら『さわるな』って怒鳴るのよ」